終り無きテロ

慎太郎は、一二月三日にリヤドに戻った。空港には、会社の運転手、オスマが迎えに来てくれていた。二三日間の休暇だったから、それほど長期間オスマに会っていなかったわけではないのに、その笑顔が懐かしかった。

住めば都とは良く言ったもので、リヤドに戻った慎太郎には、いつの間にかまるで故郷に戻ったような安堵感があった。

「オスマ、アッサラーム・アレイコム。深夜の出迎え有り難う」

「アレイコム・サラーム。ミスター・イケナミ」

オスマも慎太郎の帰りを待ち望んでいた。慎太郎のサムソナイトとバッグを受け取ると嬉しそうに車まで先導した。

「オスマ、ラマダン休暇にはどこかへ行ったの。また、昨年と同じようにドバイに行ってドバイ・ハビビ(恋人)と会って来たの」

「いや〜、行きませんでした。ミスター・イケナミに言って

いなかったでしょうか。実はドバイ・ハビビとはとっくの昔に別れたんですよ。今はベイルート・ハビビです。ミスターイケナミの好きなハイファ(レバノンの女性歌手)とは似ていませんがね」

「そうか、それじゃ、ベイルートに行ったのかい」

「違います。今度は、じっくりと故郷のアブハに帰りました。家族や友達に会ってきました」、

「それで、ミスター・イケナミに言わなければならないことが出来ちゃたんですよ」

「そう、何」

そこで二人は車に着いた。

オスマは慎太郎のサムソナイトとバッグをトランクに入れながら応えた。

「車の中で、道々お話しましょう」

そして、オスマは運転席に入った。慎太郎は久し振りに、いつもの助手席に座った。オスマは満足気に慎太郎の顔を眺めると、いつもの通りにやりとしてエンジンを掛け勢いよく発進した。

車が瞬く間に空港ビルのフライオーバー(高架橋)を超え空港の外に出ると、オスマはぼつぼつと話し始めた。

「あのスルタンさんのことなんですが・・・私は、つねづね只者ではないと思っていたんですが、その通りでした。どこかで見たような気がしていたので、アブハの友達に聞いてみたんですが、アルバハの主要部族の出身で、なんとシェイクですよ」

オスマは、慎太郎がそれを聞いて驚くと思っていたようだった。

慎太郎はオスマに悪いような気がしたが正直に応えた。

「そうだね」

「な～んだ。ミスター・イケナミは知っていたんですか」

オスマは多少拍子抜けしたが今度こそ驚くだろうとアブハで聞いてきた話を続けた。

「シェイク・スルタンは、アルバハでは敬虔なモスレムとして皆の尊敬を集めています。子供の頃から頭が良くてコーラ

ンは小学生の時に既に端から端まで暗記してしまったらしいです。人から何か聞かれれば、即座に、それはコーランのどこどこに書いてあると教えたとのことでした。勿論、説明も分かりやすかったそうです。それで人が集まればすぐにその場のリーダーになったらしいんです」

オスマはまるで自分のことのように得意気だった。

「凄い人なんですね」

そして、恐る恐る話し始めた。

「それは良いんですが問題がありそうなんです。たまたま僕の親友が、シェイクと親しかったアルナミと言う人を知っていたんです。アルナミは音楽が好きでアラブの楽器ウード(ギターのような弦楽器)を演奏しながら歌をうたうのが上手だったんですが、やがて西欧のポップスにかぶれてコンサートをしたり彼の家族が嫌う水パイプを吸ったりして顰蹙(ひんしゅく)を買っていました。それをシェイクが更生させたらしいんです。アルナミは敬虔なモスレムになって、彼の美声は、今度は、モスクでアザーンを唱えるようになったそうです。それはそれは美しい声だったそうです」

「それは良かったじゃないか」
「まあ、ここまでも、良かったんですかね。ところが・・・」
オスマは、話を続けるのを一瞬躊躇(ためら)った。
「ところが・・・」
慎太郎は、少し心配になってきた。
「ところが、その後がいけないんです。アルミナはイスラム過激思想に陶酔し、米国に行ってあの同時多発テロを実行してしまったんです」

スルタンが同時多発テロのテロリストと係わりあいのあったことは知らなかった。しかし、スルタンが同時多発テロを起こしたわけではない。慎太郎はオスマに確かめた。
「それをスルタンがそそのかしたとでも言うの」
「いや、そう断定は出来ないんですが・・・。あの、その、結局、シェイクがテロリストの黒幕で資金援助をしていたんじゃないかという人がいるですよ。テロリスト細胞化のプロみたいに言われているんですよ。それで、まあ、近寄らない方が良いんではと・・・」

オスマは、しどろもどろだったが、慎太郎を心配しながらそう応えた。

「オスマ、忠告有り難う。でも、それだけでは、危険、問題ありとは言えないんじゃない。資金援助というのも、イスラムの場合には、判断が難しいところだね。あの駐英大使アブドルアジズ妃殿下も知らずに資金援助というか、ザカートというか、それでテロリストを助けちゃったらしい。結局、妃殿下は無罪になったんだけどね」

慎太郎は、スルタンを知らず知らずにかばっていた。スルタンを信じたくて必死でテロリストの黒幕として断定出来ない事実を思い出してオスマにそれを話したのだった。

「それに、もう一つあるんですけど・・・」

オスマは、慎太郎の顔色を窺いながら、また恐る恐る話した。

「まだ、あるの」

「あの、家(うち)の事務所にいたラミアなんですけど、偶然かもしれないんですが、シェイク・スルタンの息のかかった広告代理店の渉外部長になっているんですよ」

「・・・・・」

「ミスター・イケナミにラミアからアプローチはなかったですか」

それを聞いて慎太郎はギクッとした。ラマダン休暇に出る前に、たまたまファイサリア・モールでラミアに会ってそのままレジデンスで関係を持ったことがあった。あれがラミアからのアプローチだったのか。慎太郎はそのようには思えなかった。第一、スルタンがテロリストの黒幕と決まった分けではないし、ラミアがスルタンの手先とは言い切れない。

「いや・・・」

慎太郎は正直に言うのが面倒だったのでオスマにはそうお茶を濁しておいた。

「それなら、良いんですが。これから気を付けた方が良さそうですよ。ラミアはなにしろ美人だし魅力的なバディですか

らね」、

「それに・・・まあ、あの娘は、なにしろあそこの具合が良くって・・」

そう言うと、オスマはにやにやしていた。

慎太郎は、それを聞いて急に不愉快になった。オスマはラミアが自分と関係のあったことを自慢気に仄(ほの)めかしているように聞えたからだ。そして、ラミアへの想いが急速に萎んで行くのを感じていた。

また、スルタンが、それとなく近づいて慎太郎を細胞化して、例えば、日本でのテロを企てるなどということは考えたくなかったし、そんなことはないだろうと思っていた。

しかし、オスマに言われてみると思い当たる節が全く無いわけでもない。警戒するに越したことはなさそうだ。

リヤドに戻った翌日には、ハッサンの店に顔を出した。銀座鳩居堂で買ってきた土産を上げたら大喜びだった。

ハッサンはいつものようにアラビアン・コーヒーを煎(い)れてくれた。慎太郎は、いつしかハッサンの店に居ると落ち着きを感じるようになっていた。

この日はハッサンが夕食を奢(おご)ってくれることになった。夕食を奢るとは言っても普段しているように仕事の合間にさっとテイクアウトを買ってきて店で話をしながら二人で食べるだけだというので慎太郎は気楽にご馳走になることにした。彼がいつも利用しているのはファイサリア・モールにあるシリア人のパン屋だという。

その店に行って見ると彼はパンと言っていたが、その店の英語表示ではパイと書かれていた。しかし、見たところはパイというよりもピザのようなものだった。価格は奢るという言葉にはそぐわない安さだった。二人で六リヤル(約一八〇円)だ。しかし、食べてみて慎太郎は、直ぐにその味の虜になってしまった。

ハッサンの愛好するパンはペイスト状の胡麻(ごま)が塗

られたものとほうれん草入りのものだった。焼きたては本当に美味しかった。胡麻パンが二リアル、ほうれん草パンが一リヤルだった。大金持ちのハッサンでも毎日仕事の合間にさっと食べるものはそんなものだった。あるいは彼も御多分に洩れず相当な肥満だったからダイエットを意識していたのかも知れない。慎太郎は、この二つを食べればお腹が一杯になった。ハッサンのお蔭で、また、ファイサリア・モールの安くて美味しい店を一つ憶えることが出来た。

一二月のリヤドの気温は大分低下していて朝晩は一〇度を下回っていた。

慎太郎の不在中には大規模なテロ攻撃はなかった。

この間、サウジ治安部隊は、相変わらず全国規模でテロリストの摘発に努め着々とその成果を挙げて来ていた。

一一月二三日には、昨年一一月に慎太郎がリヤドに着いた直後に起きたムハヤ・コンパウンド爆破事件の首謀者の一人をジェッダのアル・ジャミヤ地区で銃撃戦の末殺害した。この銃撃戦は車を尋問中に行われたもので治安部隊は同時に

もう一人のテロリストも射殺した。その車には一トン以上の爆発物が搭載されていて、すんでのことで爆弾テロが行われるところだった。また、テロリストの車の中からは手榴弾三個、拳銃一丁、機関銃二丁、四〇〇発以上の弾丸を入れた弾倉一一個、現金九四〇〇リヤル(約二八万円)が押収された。

さらに、治安部隊は、一一月下旬には少なくとも一〇人のテロリスト、一二月初めにはマジマ北方のアル・タウィヤで二人、ブライダとハフル・アルバトンで一人づつの計四人のテロリストを逮捕した。

一方、ベルギー政府が今年七月に最重要指名手配者を逮捕していたことを発表しており、これにより二六人の最重要指名手配リストが九人へと減少した。逮捕されたテロリストはモロッコ人で五月のアルコバール・コンパウンド襲撃事件に加担したものだった。

慎太郎は、このような動きを予想通りサウジの治安能力が徐々に発揮されて来たものと受け止めていた。

ところが、その矢先の一二月六日、こともあろうにジェッダの米国総領事館がテロリストの攻撃を受けるという事件が起きてしまった。

米総領事館は、日本総領事館とはそんなに離れていないパレスタイン通りに面した場所にあった。領事館を襲ったテロリスト五人のうち三人が射殺され一人が病院で死亡した。残る一人は負傷し逮捕された。

テロリストたちは総領事館のゲートに二台の車が進入するところを奇襲したため総領事館側は一方の車両に乗っていた米国人女性を助けるためゲートを閉め切れずテロリストが領事館の敷地内へ侵入することを阻止出来なかった。この襲撃で外国人の従業員と契約会社の社員五人が殺されてしまった。米国人には犠牲者は出なかった。テロリストが米国旗を燃やしたとの情報もあったが定かではない。

この事件は相当な深刻さで世界中に報道され、慎太郎にも日本から気遣いのメールが幾つか届いた。おかげで日本での報道ぶりも窺い知れた。慎太郎は、さっそく返信しセキュリティ・チェックが急に厳しくなったもののリヤドは至って平

穏であること、リヤドの米国大使館がジェッダのような攻撃を受ける可能性は低いことなどを伝えた。

一時帰国の時に読朝新聞の古井編集委員が現地は外で心配しているほどのことはないことが多いと言った通り日本で心配している程のことはなかった。慎太郎は、決して楽観はしていなかったが、過剰反応も考えものだと思った。ただ、サウジで外国公館が襲撃を受けたのは、これが初めてのことだった。

慎太郎は、若いテロリストの死を覚悟した行為に胸を痛めていた。スルタンから教えられるまでもなくムスリムは唯一神アラー、天国を信じていてイスラムの正義のために死ねば天国に行けると考えていることは知っていた。しかし、前途遼遠(ぜんとりょうえん)の若者達が次から次へと進んで自らの命を絶つことには割り切れない気持ちを抱いていた。

テロリスト達は口々に、

「ラ・イラハ・イラッラー」

と唱えながら米総領事館に突入したという。

原油価格は一〇月に史上最高値を記録した後、低下を続け一二月一三日には四一ドルとなった。しかし、一二月一〇日の第一三三回ＯＰＥＣ臨時総会での減産遵守決議(翌年一月一日から日量一〇〇万バレルの実質減産)、北半球における厳冬、米国における低在庫、北海、メキシコ湾岸、ナイジェリア、イラクにおける供給障害などにより、その後は再び上昇に転じた。

このような動きと厳冬予想を受けて、投機家達がニューヨークの石油先物市場での取引を増やし始めたことも、この価格上昇の背景にあった。

そこに、十二月六日に米国総領事館を攻撃したテロリストを称え、中東の石油施設を攻撃するよう促すオサマ・ビン・ラディンの声明が十二月十七日にメディアで公開された。

その内容は次のようなものだった。

- サウジの政府高官がサウジに損害をもたらしている。サウジにおける統治者と国民の対立は不信仰とイスラム共

同体の世界規模での対立という側面を持つ。不信仰を支持するのは米国の率いる背教者達でありイスラム共同体の前面にはジハド戦士達がいる。

- アッラーよ、ジェッダ米国総領事館に侵入したジハド戦士達に慈悲を与え給え。米国人がアラビア半島に存在することはイスラム法によって禁じられているのだ。
- （米国が）我々の国を支配しようとする最大の目的は石油にある。石油と米国を切り離すべくイラクやアラビア湾岸の石油関連施設を集中して攻撃せよ。

この声明を受け原油価格は一二月二一日には四五ドル台へと復帰した。暫らく静かだったイブラヒムが再び元気になって来た。

しかし、それも束の間で、米国における石油在庫増、暖冬予想などもあり原油価格は五〇ドルに向かうどころか再び低下を始めた。

目まぐるしく大幅に乱高下する原油価格にイブラヒムと植木は、またまた一喜一憂していた。

いつの間にか月日が経ち、慎太郎のところに、アリ石油相が約束してくれていたカティーフ・プロジェクト開所式の招待状が届いた。佐々木リヤド支店長にそれを話すと、諸外国の高官、外交官などに混じって慎太郎が招待されたことを殊の外喜んでくれた。佐々木は何日出張しても構わないと言ってはくれたが、生憎、往復ともサウジアラムコの用意する特別機を利用した日帰りのスケジュールだった。

一二月二六日、慎太郎はオスマの運転する車で、いつも利用するリヤド国際空港のターミナルではなく国際空港に併設された私用特別ターミナルへと向かった。いつもの空港への道から離れ、しばらく土漠の中の道を進むと、ようやくそのターミナルが見えてきた。外交官ナンバーの車が沢山並んでいる駐車場を抜け入口に進むとサウジアラムコの職員達が大勢で待ち構えていた。

ターミナルに入り待合室に通されると、そこでは既に何人かがソフトドリンクを飲みながら歓談していた。林もその中にいた。意外なことに植木もいた。慎太郎は林を驚かそうと

思って開所式に招待されていることを林に伝えていなかった。林は慎太郎を見つけると案の上驚いて早速慎太郎のところにやってきた。この開所式に招待されたのは日本人では林と植木、それに慎太郎だけだった。林でさえ大使の代理で参加したとのことだった。植木も事務局長代理とかで急に参加することになったと言っていた。

サウジアラムコの特別機は快適だった。私用特別ターミナルから飛び立ち三〇分強でカティーフに着いてしまうのだが、その短い時間にジュースなど飲物付きの立派な軽食が出された。特別機は座席数が七〇人くらいの新しくて綺麗な小型ジェット機だった。座席はビジネスクラス並みにゆったりと作られていたが、乗り込んだ招待客が二〇人程度と少なかったこともあってファーストクラス並みの贅沢(ぜいたく)な気分を味わえた。このようなジェット機が招待客を乗せ何台も次から次へとカティーフに向け飛び立って行った。三人は、さすがに世界最大の石油会社は違うものだと感心した。ジェット機の窓からは眼下にリヤド郊外に広がる沙漠や無数の岩山が見えていた。

開所式はサウジらしく大きなテントの中で行われた。テントとは言っても普通の布製のテントではない。壁にはしっかりした柱があり、より頑丈なものだった。冷暖房も付いている。サウジではテントはむしろ公式で様々な公式行事に使用されている。布製でたわみのある天井にはアラブらしさが感じられたしサウジ人はこのようなところが落ち着くのだろうと思われた。

サード皇太子も出席した宴席は大層豪華なものだった。各テーブルには所狭しと高級西洋料理も並べられていたがサウジらしく秀逸な羊の肉も用意されていた。

宴席後には専用バスによる工場見学が行われた。

このカティーフ生産施設プロジェクトはサウジにとっても消費国全体にとっても歓迎すべきものだった。また、サード皇太子は今回前後してサウジ東部にあるジューベイル工業地帯の他の幾つかの大プロジェクトの開所式も執り行った。これらのプロジェクトは一九七五年に開始されたサウジ

工業化の成功の象徴だった。この工業団地、ジューベイル工業都市Ⅱの最終的完成は二〇二二年だが第一段階は二〇〇八年に完成予定だった。今回開所式が行われるプロジェクトには電力プロジェクト、基礎産業局傘下の民間プロジェクトなどがあった。

カティーフ・プロジェクトは、陸上部分がアラビアン・ライト(原油の一種)を日量五〇万バレル生産出来る施設、沖合がアラビアン・ミディアムを日量三〇万バレル生産できるアブ・サファ油田からなる。また、この施設は原油生産に伴って生じる随伴ガスを日量三億七〇〇〇万立方フィート処理しコンデンセートを日量四万バレル生産することも出来る。世界最大級のプロジェクトだ。乏しい資源の日本にしてみれば羨ましい限りのものだった。

また、この開所式ではサード皇太子の前でアリ石油相、ジュマ・サウジアラムコ社長が演説を行った。

アリはサウジが石油市場の安定を標榜していることを力説した後、世界石油需給バランスのために尽力し石油価格の

安定に寄与することを力強く表明した。

そして、サウジの原油生産能力は現在、日量一一〇〇万バレルであり日量約二〇〇万バレルの余力を持っていることを明らかにした。さらに、今後、サウジの可採石油埋蔵量を二〇〇〇億バレル増加することを希望していると発言した。ピークオイル論を受け売りしているイブラヒムにも聞かせたいような内容だった。まことに頼もしい限りだ。

本当にこれが実現出来れば、世界石油供給には相当の余裕が出ることになる。アリ石油相は、二〇〇六年完成予定のハラダ油田にも触れ、その生産能力が日量三〇万バレルになることを明らかにした。加えて、アブ・ハドリヤ、アル・ファダリ、アル・クルサニア各油田の開発も進行しており、これらが完成すれば軽質原油が日量五〇万バレル以上追加生産されることになると言及した。

リヤドには夕方に戻る予定だったが、開所式のスケジュールが大幅に遅れたために三人がリヤド空港に帰り着いた時にはすっかり夜が更けていた。

植木は待機していた事務局長の運転手に呼び止められたので林と慎太郎に挨拶をしてそそくさとその場を去った。このような特別の空港に慣れていないせいかオスマは直ぐには目に付かなかった。

林は心配して、もしオスマが間違えて帰ってしまっているようだったら館用車で送ってくれると言ってくれたが、やがてオスマが現れた。

慎太郎は仕事とは言え要領の得ないところでじっと待っていてくれたオスマに飛行機が遅れた詫(わ)びを言うと車に乗り込んだ。

乗り込むとオスマの様子がおかしいことに気付いた。

何かに怯(おび)えた風だった。

その理由は道々彼の話を聞いて分かった。今朝早く発生したスマトラ沖地震に関することだった。彼は、慎太郎を待っている間、待合室でテレビを見ていてスマトラ沖地震の被害が相当に大きいことを知った。スリランカ、インドを襲った大津波の光景を見て怯えていたのだ。

大きな津波に次々と飲み込まれてゆく建物、車、逃げ遅れ

た人々の姿を慎太郎に興奮しながら伝えていた。死者は優に二〇万人を超えるのではないかと報じられていた。慎太郎はその被害の大きさに愕然とした。しかし、何の影響も受けなかったオスマが何故そこまで怯えるのか理解出来なかった。

彼が、この地震もアラーが我々を戒めるために起こしたものだと言うのを聞いて、やっとその理由がわかった。

ただ、モスレムであるオスマが何でもアラーの仕業と考えたいことはわかるが、このような大被害を齎(もたら)した天災をアラーのためとする気持ちが分からなかった。

オスマ自身が本当にそのように考えたのか、あるいはそこにいた誰かがそのようにオスマに言ったのかどうかは分からなかったが、彼の怯えた姿を見ると、そのようなことを聞く気持ちにはならなかった。

慎太郎は、あの無謀な米国総領事館襲撃事件以来、テロリストの逮捕が進む一方しばらくは何事も無く過ぎ安堵(あんど)していたが、一二月二九日に、また世界を揺るがす事件がリヤドで発生してしまった。

それは午後八時過ぎのことだった。いきなり慎太郎のレジデンスが大きく揺れ窓ガラスがビリビリと振動した。続いて、レジデンスの窓からは、パトカーがサイレンを鳴らし大挙して大通りを内務省の方向に走り去って行くのが見えた。

断続的だったが二〇数台は通り過ぎて行った。中に混じって救急車も一台サイレンを鳴らして通り過ぎて行った。

慎太郎は何事があったのかと直ぐにレジデンスの受付に電話を入れてみたが詳細は不明とのことだった。

慎太郎は直ぐに重い椅子をドアの前まで必死に運びドアが押し開けられないようにドアに立て掛けた。こうすれば、例えテロリストが鍵を壊しても侵入することは出来ないだろうと思ったからだ。

今回もまたオスマが電話を掛けてきてくれたのでテレビ

を付けるとＢＢＣがリヤドで自動車爆弾によるテロが三回あったと報じていた。いつものことながら、その報道の早さには舌を巻いた。ＣＮＮも同じくらいの早さで同様の報道をしていた。

しばらくすると現場の映像さえ放送されていた。いかにサウジ中枢の内務省近辺の爆破事件とは言え、あっと言う間にニュースが世界を駆け巡ったのには驚かされた。

林からも携帯に電話が入った。慎太郎は林の気遣いに礼を言った。林は冗談ぽく日本人の無事確認のために電話をしただけと言いながら慎太郎の無事を喜んでくれた。

林によれば、このような緊急時には日本人会のネットワークを使って無事を確認することになっているが、慎太郎が日本人会に入っていないために、じきじきに電話を入れざるを得なかったのだった。

その後、自動車爆弾テロは三回ではなく二回だったことがわかった。一回は内務省付近で爆発した。これはリモコン操作によるもので操作性が悪く内務省近くのトンネル内で爆発してしまった。従って内務省の門と周囲の商店に僅(わず)

かな被害を与えただけだった。もう一回はこの爆発から三〇分後で特殊部隊の訓練施設が攻撃目標となった。

内務省は、この二回にわたる爆弾事件の被害はほんの僅かだったと発表した。

他方、治安部隊は同日のテロ直前にジェッダでテロリストを一人逮捕し、テロの直後にはテロリストの隠れ家を急襲して七人を射殺した。また、事件の前日の二八日にもテロリストの隠れ家を急襲し三人のテロリストを射殺していたから、治安部隊は二日間に計一〇人のテロリストを射殺したことになる。このような動きを見ると、治安部隊はテロについて事前に何等かの情報を得ていた可能性が高い。これらの射殺者の中には、二人の最重要指名手配者が含まれていた。これで最重要指名手配者の数は六人に減少した。このように最重要指名手配者の数は着実に減少して行った。

この爆弾事件では二人が巻き添えとなって死亡した。一人は、ガソリンスタンドに働くアジア系外国人だった。二八日に行われた治安部隊の急襲の前にガソリンスタンドで最初

の銃撃戦があった時にその戦闘に巻き込まれたものだ。もう一人は爆発の際に内務省付近を走っていたタクシー運転手だった。

この内務省前などの爆弾事件は、その被害が僅少だったことには全く関係なく原油価格を一二月二八日の四一・七七ドルから二九日の四三・六四ドルへと引き上げてしまった。そして、これが二〇〇五年の高値への誘い水となった。

慎太郎は、リヤドで正月を迎えることになった。

サウジではクリスマス、年末年始のセールも無いので拍子抜けだが、慎太郎は三一日の大晦日にＮＨＫの国際放送で紅白歌合戦を見て、日本で除夜の鐘がなり終わる頃に実家に電話をかけた。

サウジと日本との時差が六時間あるから、午後三時から紅白を見て午後六時過ぎに新年の挨拶をするという全く実感の湧かないものだった。それでも電話の向こうから両親の声が聞こえるとやはり正月らしい雰囲気となった。電話で話し

た時間はそれほど長くはなかったが、慎太郎の心は安らいだ。昨年一一月の一時帰国の時に実家に滞在し十分に話す時間を持ててはいたが心持ち両親は涙ぐんでいた。心底心配してくれるのは有り難いことだった。慎太郎はそのような心配を掛けていることを申し訳なく思った。歳月は確実に両親を老いさせているという実感もあった。

早くプロジェクトの目処を付けなければいけないと改めて思ったが、この国では気ばかり焦っても致し方無いことも明らかだった。じっと機を見るより他に仕方が無い。

二〇〇五年は、一月一二日からズルヒッジャ(巡礼)月(イスラム暦の一二月)が始まった。イブラヒムはハッジに行くと張り切っていた。

ハッジはムスリムが実践しなければならない五行の一つで、少なくとも一生に一回は行わなければならないメッカの神殿やその周辺の聖所への巡礼だ。その主要部分はイスラム暦一二月の八日から一〇日までの三日間をかけて行われる(二〇〇五年の場合は、西暦一月一八日から二〇日)。巡礼者

は、金持ちも貧者も皆同じ真っ白な縫い目の無い二つの布で出来た巡礼衣を着て、メッカのハラムモスク、カーバ神殿、アラファトの丘、ラフマ山などを巡り、ミナーで石投げを行う。そして、その後、羊、駱駝など動物を殺して犠牲を祝い終了する。

この巡礼明けの犠牲の祝いはイード・ル・アドハー(犠牲祭・大祭礼)と呼ばれイスラム世界各地で同時に行なわれる。イスラム最大の祝日(一〇日、一一日、一二日の三日間)だ。日本の正月に匹敵すると考えて良い。

これらを無事終了した巡礼者は自分の名前の上にハッジを冠して呼ばれ人々から尊敬されることになる。ハッジの際には、髭、爪を切らず禁忌状態で過ごす。ハッジに行かないものでも、ハッジの身となって、この時期に髭、爪を切らずに過ごしているムスリムが多い。リヤドでも、そのような人が散見されるが、無精髭を生やした大変むさ苦しいものだ。

イブラヒムは原油価格が再び五〇ドルに向かって上昇して来たこともあって嬉々としてハッジに出かけて行った。

慎太郎は、テレビでハッジに関する報道番組を見ていた。番組ではハッジの模様を実況で伝えていたが中継地点のどこもかしこも人だらけだった。集まった人々は、口々に、

「ラッバイカッラーフンマ　ラッバイカ(アラーよ、私は御前(おんまえ)におります。御前におります)」、

「ラッバイカッラーフンマ(アラーよ私は御前におります)」

と唱え歩いていた。

また、肌の色、貴賤、国籍を超え、皆、和やかに挨拶をしたり会話を楽しんだりしていた。ムスリム達は出かける時のイブラヒムのように皆嬉しそうな顔をしていた。

黒いカバーで覆われたカーバ神殿の周りを大勢の白装束の人々がひしめき合って時計とは逆方向に回っていた。壮観だった。皆、七回回らなければならない。参加した人々はイスラム教徒間の強い連帯感を感じていたに違いない。

今回のハッジには約三〇〇万人が参加した。その内、外国からの参加者は一二〇万人程度だった。例年、トルコ、イン

ド、パキスタンからはそれぞれ一〇万人を超える人々が参加している。この一週間にわたるハッジ関連行事がサウジ経済に与える利益をサウジのエコノミストはメッカ巡礼の直接的利益が八〇億から一〇〇億リヤル、サウジ全土の犠牲祭などの副次、相乗効果を入れると三二〇億から四〇〇億リヤル(約一兆二〇〇〇億円)と試算している。

慎太郎も一度はメッカに行ってみたいと思っていたが異教徒は決してメッカに入ることは出来ないので、それは全く不可能なことだった。